

## ねがいのいえニュース 第43号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2016年5月15日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail negainoie@r6.dion.ne.jp Hp <http://www.negainoie.com>



うらかな春の日を突然襲った大災害に多くの人が苦境に立たされています。全てを投げだして支援に駆けつけたいと思いつつ、身近な方たちの困り感に添い続ける日々を送りながら、せめて1週間でもボランティアに出かけられないかと思案する毎日です。

みなさまのご無事を祈っております。

### ケアホーム計画経過報告

多くの方から寄付と融資を受け進めているケアホーム計画ですが、土地購入から1年経った今、残念ながら何も進んでいません。市街化調整区域で建設するに当たり開発の手続きが必要であるため、さいたま市の建築課と交渉を続けていますが、許可を得られないところで止まっています。調整区域を開発するには相当する理由が必要というのが市からの回答です。しかしこの地域は一帯が調整区域であり、現実に老人施設が数多く立ち並ぶ地域の実状の中で、なぜ私たちの計画だけが受け入れられないのか、大変不可解です。

ねがいのいえが対象としているのは、身体的にも知的にも最重度の困り感の高い方たちであり、ご家族はその介護負担にいつまで耐えられるのか待ったなしの状況です。一日も早く建設を進め、追い詰められているみなさまを支え切ることが私たちの悲願であり、また、重度の障害があっても普通に暮らせる地域作りを目標に掲げる私たちにとって、長い道のりの第一歩でもあります。

行政のみなさまには、市民の苦しみに寄り添う想いを強く持っていただき、その苦しい方たちに、低賃金にもかかわらず寄り添おうとする支援者の想いに応えていただきたいと、重ねて訴えます。

### 介護負担の増すご家族

ねがいのいえは今年14年目を迎えました。入会当時幼児だった利用者のみなさまもすっかり成長され、現在は児童よりも大人のほうが多くなりました。当然のことながらご家族も年を重ねられて、その介護負担は年々増えています。どの方も入所施設へ行くことなく、生まれ育った地域で暮らしたいと望んでいるねがいのいえは、会員のみなさまの家庭の状況、介護の状況などを毎年ヒヤリングしながら、ケアホーム計画を練っています。

ご家族の状況は日々、年々、変わり続けます。ケアホーム入居の希望を毎年確認し直しますが、

10年後、20年後、と答えていたご家族が年々その希望を近い将来に修正していきます。それは当然のことであり、現在の希望はあくまで現在の状況によるもの、ご家族に緊急事態が発生すれば、昨日までの希望は何の意味もなくなります。

ご家族が病気の方からは、ホームが完成したらすぐに入居したいと言われていました。もしもホームが完成する前に家族が倒れてしまったら、おそらく本人は施設に即入所するしかなくなり、多くの支援者が今まで支えてきた地域生活は失われることになるでしょう。ホーム建設は私たちにとってもご家族にとっても急務なのです。

先日はそのご家族が夜に救急車で搬送されるという事態が起き、今からお子さんのショートをお願い出来ないかと依頼があり、すぐに迎えに行きました。幸い一泊の入院で済みましたが、その後も何度か救急搬送からの入院があり、その都度緊急の泊りを実施しています。



また、同様にすぐに入居を希望されている方のご家族に、先日不幸があり緊急ショートをおこないました。ホームでの自立に向けてふだんから週1回の泊りを定期にしているので、急な泊りにも本人のショックはほとんどなく、2泊3日のみんなとの生活を楽しんでいました。

そして、ご家族からは葬儀が終わるまで預かって欲しいと言われていましたが、本人にとって大切な親族とのお別れに、参列させてあげて欲しいと、こちらの想いを伝えました。バリアフリーの問題などもあり躊躇されていたご家族ですが、葬儀の日の朝ご自宅に送った時、「言っていたおかげで一緒に参列する覚悟が出来ました」と感謝のお言葉をいただきました。

福祉制度が整い、ショートステイやレスパイトなどでご家族の希望が叶う時代になりましたが、反面、結婚式や葬儀など、家族の大切な日にも預けられてしまう方は多いと感じます。もしも困難ならヘルパーを使っただき、家族にとって大切な日をぜひ本人も一緒に過ごしていただきたいと、私たちは願っています。

### 学さん

ケアホームで暮らす学さんもまた、最近大切なご家族を亡くされました。

家庭では乱暴なところもあり、家族との暮らしが困難になってホームに来られましたが、ホームや生活介護では世話好きが高じてやり過ぎてしまう明るさと積極性を持った学さん。入居した当初、ホームの仲間におせっかいが過ぎたり、やらなくてもいいことをやってしまい、スタッフから注意されることが度々ありました。

人とどのように接していいかわからず戸惑っていましたが、食事の時には一緒に暮らす方たちを呼んであげたり、朝の出勤時には必ず見送ってあげたり、しだいに距離感をつかんでくると、本来の優しさがみんなに理解されていきました。今では、仲間だけでなくスタッフの様子も気遣ってくれる存在です。

家庭から祖父の病状が良くないと連絡があり、スタッフの体制を整えてお見舞いに行く予定をし

ていたその前日、急変の連絡があり急遽病院に向かいました。

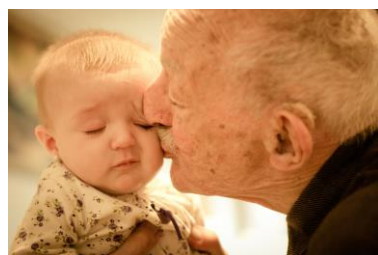
早くに病死した父の代わりだった祖父は、父のような存在でした。その祖父の強い姿とは変わってしまった姿に病室で対面した学さんは、あまりの悲しみに背を向けてうずくまり、顔を伏せたまま近づくことができませんでした。祖父の手を握ろうとしますが、動くことが出来ないまま、精一杯のお別れをしました。

悲しみが癒える間もなく葬儀に参列した学さんは、前日にケアホームでスタッフと描いたおじいさんの絵と言葉を綴った手紙を持って、葬儀場に向かいました。棺に手紙を入れる学さんはしっかりとおじいさんと最後の対面をしていました。葬儀が始まるとそっと母の横に座り、母の手を最後まで握り励ましていました。そして学さんと同じく障害を持つ弟さんのこともずっと目で追いながら、自分のほうに呼んだり、様子を気にかける姿は、長男としての立場を意識しているように見えました。

翌日の告別式でも、母に対して学さんから手を取り、最後まで寄り添い支えようとする姿は、付き添うスタッフが必要ないほど頼もしく、立派に祖父を見送りました。

そして次の週末に帰宅をした時、真っ先にお仏壇に手を合わせた学さんの姿を見て、自分も前に進まなくてはと思ったと、お母さんは語られていました。

四十九日の法要の朝も、当たり前のように喪服を手に取り着替えをして玄関を出ていく様子は、重度障害とは思えないほど立派な大人の姿でした。それは、ご家庭から自立して3年経つ学ぶさんが、一日一日を精一杯生きてきた証しであると思えました。



## 研修終了後の報告会

ねがいのいえが施設内研修としておこなっていた「障害福祉の現場職員を育成する基礎研修」を、現在は埼玉よりどころねっと主催事業として誰にでも参加していただける形で年4回実施し、これまでに約800人が受講されました。

「基礎研修」に続いて行われる「セカンドステップ研修」では、各分野の専門講師をお招きし、2日間で体と心に集中して向き合います。そして次の「サードステップ研修」では、学んだ方法を駆使して、どんな相手でも困らない職員になるための総まとめをしています。

学校や他の施設でうまくいかなかった方もみんな落ち着いて過ごせるようになるねがいのいえのケアのエッセンスを凝縮したこのプログラムを、多くの現場職員と、当事者のご家族に伝えたいという想いで、毎年続けてきました。特に昨年度は、独立行政法人福祉医療機構から助成を受け、これまでおこなっていなかった研修終了後の追跡調査や実践報告会を実施し、受講されたみなさまが各現場で素晴らしい取り組みをされていることがわかりました。

設立から数年で急成長し、今や地域の困りごとを背負う中心的存在となったある団体では、言葉のコミュニケーションが出来ない重度の知的障害のかたの粗暴な行動に困っていた時、研修に参加されました。そしてそこで東田直樹さん親子と出会い、東田さんがコミュニケーション手段として

最初に身につけた「筆談」に取り組みました。初めはなかなかうまくいかなかったけれど、コツがわかってからは本人の意思がくみとれるようになり、じょじょに行動も落ち着いていったそうです。

臨床心理士としてスクールカウンセラーや療育相談に当たっているかたは、研修で学んだタッピングセラピーを、相談に訪れた母に伝え、母から子へ実施してもらうことで、親子の関係を改善しています。

また、アセスメントからケアプランの実施まで数日から数週間をかけて改善していく通常の方法では、目の前で起きているパニックには対応できなかったのが、体に働きかけ緊張を緩めることで、今その時に落ち着きを取り戻すことができるようになったと言われていました。

強度の行動障害を持つお子さんのご家族も、全ての研修に参加されて、以下のような感想をくださいました。

「今まで受けたことがないような内容ばかりで、とても有意義なお話を聞けたり、体験をさせていただきました。

自分の精神状態がとても大切だと気づかせていただきました。わけのわからない行動ばかりして困らせる、という思いから、本人の気持ちになって考えるということも出来るようになり、接し方がだいぶ変わりました。

かづくでどうにかしなくてははいけないと今まで思っていたのですが、最近は力が強くなり勝てなくなってしまったことに不安を感じていました。しかしいろいろな方法がありかづくではないんだ、ということがわかりました。

自分がしてきたことがいかにわが子を不快にさせていたか、ということにも気づきました。研修で教えていただいたことを全てマスターしたわけではないですが、ふとした時に思い出してやってみたりしてます。

一般的な講習などを聞いても、これはうちの子のような重度の子にはちょっと違うかな、と思ってしまうことがほとんどだったのですが、この研修はうちのような子に、すぐに実践でき、興味深いことばかりでした。

受けさせていただいて本当にありがとうございました」



世の中は今、支援者が増えた代償のように、増え続ける虐待の問題と向き合っています。関わりの難しい行動障害の人たちとうまく関わっていくには、学びと経験を積み重ねて身につける技術が必要とされます。それは同時に、虐待を根本的に解決する唯一の方法です。ご家族も支援者も、うまくいかない自分を責めることなく、みんなで学び合えるようになって欲しいと思います。

そして、何も経験のない新人も、みんなが身につけてベテランのスタッフに成長していくそのねがいのいえの技術を、多くの人に学んでいただければ、私たちだけでは支えきれないもっと多くの人を支えることが出来ます。

それはまさに、私たちの願いであり、喜びです。